

高尾山古墳の被葬者

古代史研究家 高木從人著

私の研究成果をまとめた電子書籍『新日本書紀』が出版されています。この『新日本書紀』は邪馬台国＝畿内説に基づいていますが、「魏志倭人伝」の解釈等の結果、狗奴国は九州南部に位置することになります。ですから、『新日本書紀』からすれば、狗奴国は九州南部にあり、高尾山古墳とは関係無いことになります。

また、高尾山古墳は、古墳時代最初期の築造と推定されていますが、『新日本書紀』では辛酉の年、301年に即位した神武＝崇神天皇が前方後円墳体制を創始し、古墳時代の開始は4世紀になります。

ですから、『新日本書紀』からすると、神武＝崇神紀以降の4世紀の人物から被葬者を探すことになります。

高尾山古墳は、墳丘長が約六十二メートルで、築造当時の東日本では最大級の古墳です。その大きさ、埋葬施設から出土した鏡（中国鏡）や高価な朱は相当な貴人であることを示しています。

『新日本書紀』の高尾山古墳の被葬者と関係すると思われる部分を引用します。

★351年・新景行紀一五年

351年

▽▽ 336 + 55 – 40 △△

▼▼

五十五年の春二月五日に、彦狭島王（ひこさしまのみこ）が以て、東山道十五の都督を拝した。是は豊城命（とよきのみこと）の孫である。然して春日の穴咲邑（あなくひのむら）に到って、病に臥して薨去された。是の時に、東国の百姓は、その王の至られなかったことを悲しんで、窃かに王の尸（かばね）を盗んで、上野国に葬った。

▲▲

豊城命、すなわち手研耳命（たぎしみみのみこと）は垂仁天皇により殺されたが、その子孫が絶えた訳ではなく、景行天皇に仕える孫がいた。その孫の彦狭島王が豊城命の果たせなかつた東国行きを成し遂げようとして、またしても果たせなかつた。この彦狭島王は、復権した八綱田の子と考えられる。

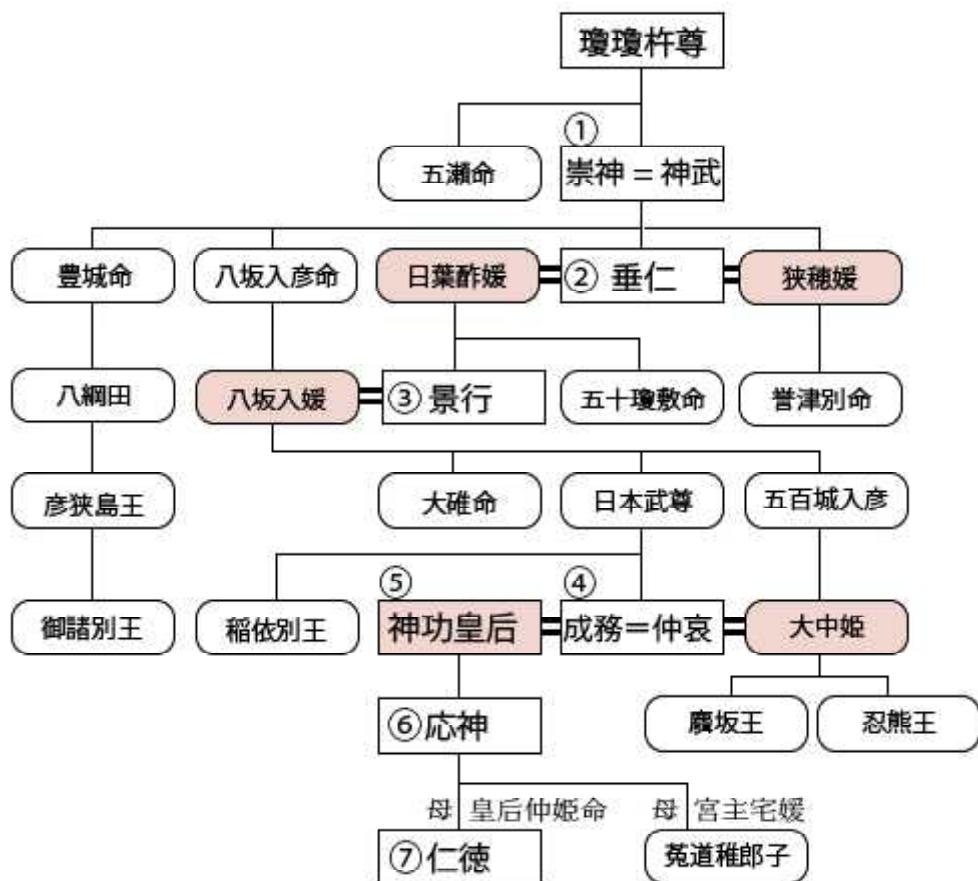
（『新日本書紀』第一巻第二部第3章「景行紀」より）

▽▽と△△で囲んだのは紀年の根拠です。

▼▼と▲▲で挟んだのは、著者による『日本書紀』の現代語訳です。

私は、その貴人が彦狭島王だと考えます。新紀年に従うと、古墳時代最初期は四世紀前半に属します。彦狭島王が亡くなった351年とそれほど離れていません。

彦狭島王の系譜は次図のようになります。彦狭島王は、神武=崇神天皇の曾孫であり、彦狭島王の子である御諸別王が父親の果たせなかつた東国行きを実現して、東国を鎮め、上毛野君・下毛野君の祖となりました。



ヤマト王権系図 瓊瓈杵～仁徳

この彦狭島王は春日の穴咲邑に到って、病に臥して薨去したと言います。「春日の穴咲邑」とは沼津のことではないでしょうか。沼津は箱根の山を越えて東国に入る直ぐ前に位置し、彦狭島王が東国に入る前に亡くなった地として相応しいのです。春日の穴咲邑も沼津を指し示しています。

「春日」の春の字は、夫と日からなります。夫をその形から富士山に見立てるに、富士山の下に日があります。よって、「春日」とは「春」が「富士山」と「日」なので、「富士山」と「日」の中の「日」ということになります。「日」は富士山(夫)の下なので、富士山の麓を示しています。他方、沼津市は富士山の麓にあると言えます。

次に、「穴咲」ですが穴の食ったということでしょう。沼津には昔、沼が沢山あったので、沼津という地名が付きました。穴が食ったように沼が沢山ありました。これも沼津を指し示しています。

よって、彦狭島王は沼津で亡くなりました。その沼津にある高尾山古墳の被葬者埋葬状況を見てみましょう。沼津市教育委員会の担当者に問い合わせたところ、木棺直葬で、木棺については、土坑の形状から長さ5メートル強の舟形であったものと推定しているが、いくつかの木片しか残存していなかった。被葬者に関わる骨・歯などもまったく残されていなかった。ただ、顔の付近に置かれることが多い鏡や、胸にさげられた勾玉の位置から遺体のおよその位置を推定することは可能だと言います。

この状況は書紀の語る彦狭島王の死後の出来事から説明できます。「東国の百姓は、その王の至られなかったことを悲しんで、窃かに王の尸を盗んで、上野国に葬った」ために、高尾山古墳からは、被葬者の遺体の痕跡である骨・歯などが全く出てこなかったのです。そして、王の尸を持ち去った者達は、財物目当ての盗人とは違うことを示すために、鏡や勾玉に手をつけずに残していったのです。こういうことではないでしょうか。

以上より、高尾山古墳の被葬者は彦狭島王だと強く推測できます。

Copyright © Hidefumi Kubota 2015